

# Solan Primary School

4th grade news letter

# Venture

# Fourth

2023 Nov. 19

## あなたの夢はなんですか？その時、少女はこう答えた。

私が、海外に行って様々な仕事をするようになったきっかけがあります。

それは、池間哲郎さんという方の著作との出会いです。

ページをめくる手が何度涙で止まったか分かりません。

タイトルは後程紹介します。

尚、小学生でも読めるように分かりやすい記述で書かれた本ですが、内容がとても濃いです。

センシティブな内容も結構含まれます。

もし読みたい人は、お家の人に必要な部分を読んで聞かせてもらうのがいいかもしれません。

ちなみに昨日教室でちょっと紹介しただけで「読んでみたい！」という子がたくさんいたので、どんなお話が載っているか、ざわりだけを紹介します。

本は、次のように始まります。

かつてフィリピンの首都マニラのトンド地区に、スモーキーマウンテンという場所がありました。ここは首都の広大なゴミ捨て場。一日中ダンプカーでゴミが運び込まれ、ここに捨てられていきます。積み重ねられたごみは自然発火して、いつも煙が上がっています。だから「煙の山」、スモーキーマウンテンと呼ばれていたのです。

1993年の4月、このスモーキーマウンテンを初めて訪れました。あたり一

面、目も開けられないほどの煙が立ちこめ、吐き気をもよおす悪臭がただよっていました。私はカメラを抱えて走り回り、ゴミを拾う人々のすさまじいばかりの生活環境をファインダーにとらえていきました。

ビンやスクラップなどのゴミを拾って、それをリサイクル業者に売って暮らしている子どもたちがいました。中には五歳にも満たないと思われる子どももいます。手や足は真っ黒に汚れ、皮がめくれて血だらけ。それでも子どもたちは、一心不乱にゴミを拾っていました。

数人の子どもたちが遊んでいたの話を聞いてみました。全員がゴミを拾うことを毎日の仕事にしている子どもたちです。その中に一人の少女がいました。足の先から頭のとっぺんまで真っ黒に汚れ、ボロボロの T シャツを着た十歳くらいの女の子です。瞳がキラキラと輝き、かわいい笑顔が印象的でした。

私はこの子に聞いてみました。

「あなたの夢は何ですか？」

ここまでを概略として話した後、少し間を置きました。

「なんて答えたと思う？」

子どもたちは、うーんと考え込んでいます。

静かに、答えを発表しました。本は、次のように続きます。

少女はニコニコしながら答えました。

「私の夢は大人になるまで生きることです。」

この答えを聞いて、グッと胸にきました。笑顔だったから、よけいにこたえました。大人になるまで生きるなんて当然のことだ、とっていました。そんな当たり前のことが夢だと聞いて、愕然（がくぜん）としてしまったのです。

振り返ってみれば、三十代後半までの私の人生は中途半端なものでした。真剣に生きたことなど一度も無い。努力を重ねて物事を達成したこともない。すべてに適当に生きていました。そんな私にとって、ゴミ捨て場の子ども

もたちとの出会いは、それまでの生き方を全て破壊するぐらいの衝撃でした。

彼らが必死で生きている姿を見て涙が止まらなくなり、ゴミの中で人目もはばからず大声で泣いてしまいました。ぶざまな人生を歩んできた自分が恥ずかしくなったのです。

同時に「今まで何をしていたのだ」と怒りとも思える感情がわき上がり、「真剣に生きなければ」と心の底から思いました。小さな子どもたちがゴミの中で必死に生きているのに、大の大人の自分が一生懸命生きていない。それは子どもたちに対して失礼だと感じました。そして、アジアの貧しい子どもたちと一生付き合っていくことを自分に誓ったのです。

話を聞いたみんなは、啞然としていました。

そうした状況がすぐ近くの国であることを知って、さらに驚いていました。

本のタイトルは、このことをそのまま言語化しています。

『あなたの夢はなんですか？私の夢は大人になるまで生きることです。』

著作には、次のことも書いてありました。

子どもたちは、夜明けとともに働きます。朝の 5 時、6 時から一日 10 時間近く働くのが当たり前だそうです。しかし、それほど必死に働いても、もらえるお金は日本円で 50 円程度でしかありません。こういう子どもたちが生き延びるのはとても難しいことです。満足な食事をとることができないため、ほとんどの子どもは栄養失調の状態です。

ゴミ捨て場の世界で、子どもたちが 15 歳まで生きる確率は、三人に一人と言われていています。残念なことです、それが現実です。しょうがないのです。それほど劣悪な環境の中に暮らしているのです。「生きたい、生きたい」と願っても、大人になるまで生き延びることが困難な子どもたちがいます。「大人になるまで生きる」という、私たちにとっては当たり前のことが当たり前ではない子どもたちが同じアジアにたくさんいるのです。このことをどうかわかってほしいと思います。

本当に厳しい現実です。

でも、子どもたちは少なからずこうした状況を知っているようでした。

本やテレビで見たり、お家の方から話してもらったことがある子も多いよ

うです。

顔き、食い入るように話を聞いている姿からもそれが伝わってきました。

関連して、本の一節をもう一つだけ紹介しました。

ある日、ゴミ捨て場に暮らしている子どもたちを連れてピクニックに行きました。もちろん、弁当は私のおごりです。その中身は彼らが今までに食べたことのないほどのごちそうでした。

昼食の時間がやってきて、弁当のフタを開けて中身を見た子どもたちは「キ ャーキャー」と声を出して喜びました。うれしさのあまりピョンピョンと飛び跳ねている子どももいます。

状況を見かねた池間さん。

その子たちに少しでも楽しい時間を、との思いでピクニックに連れて行った時の話です。

ごちそうを見た時の子どもたちが、どれほど嬉しかったことか。

それは、私たちが誕生日やお正月にごちそうを囲むよりも、はるかに強い喜びだったに違いありません。

それほどに、大変な環境の中で日々を生き抜いているということです。

ちなみに私はこの話を、本だけではなく直接の講演会でも聞きました。

さて、みなさん想像してみてください。

お弁当を開けた後、子どもたちはどんな様子で食べたと思いますか。

夢中で食べた？

大喜びで食べた？

泣きながら食べた？

次ページを読む前に、一度考えてみてください。

次のように書いてありました。

しばらくして「サアーお昼を食べよう」と言うと、意外なことが起きました。全員が弁当のフタを閉じて、食べてくれないのです。どうしてなのか、私にはわけがわかりませんでした。

黙って様子を見ていると、六歳ぐらいの少女が私の前にやってきました。そして、今にも泣きそうな顔で「おじさんにお願ひがあります」と言うのです。「なんですか？」と聞くと、少女は私にこう言いました。

「こんなごちそうを私だけで食べることはできません。お家に持って帰って、お父さん、お母さんと一緒に食べていいですか？」

びっくりしました。お腹が空いているだろうに我慢をして、お父さんお母さんにもごちそうを食べさせたいと言うのです。結局、誰も一口も食べずに弁当を持って帰ることになりました。

フィリピンだけではなくありません。モンゴル、カンボジアなどのアジアの各地の貧しい地域で、同じようなことを経験しました。心の奥底から親を思う子どもたちとたくさん出会い、そのたびに、なぜこれほどまでに親を思えるのかと考えさせられました。

私にも幼い頃に似たような記憶があります。父親が結婚式に招待されると、出された折り詰め弁当に手をつけずに持ち帰ってきました。その弁当を家族みんなで大事に食べました。あの時のおいしさは今でも忘れる事ができません。

われわれは豊かな社会を作りました。物がありあまり、毎日の食事に困ることもありません。しかし、人を愛する心、家族の絆、生きる力など、人間として大切にしなければならないことを忘れがちになっているのではないのでしょうか？豊かさを否定するつもりはありませんが、失ってしまったものの大きさについても考えてみる必要があるのではないのでしょうか？

アジアの子どもたちを見て、そんなことを思いました。

クラスみんなは、絶句していました。

この本との出会いは、私にとっても大きなきっかけとなりました。

読んだのは、教師になって一年目の時です。

あまりの衝撃に思わず数冊を買って、知人に贈りました。

色んな方に口伝えで紹介もしました。

でも、これはほんの少しの動きにしかありません。

私の仕事は、教師です。

授業を通じて、教育を通じて、こうしたことについて子どもたちに伝えていくことが本筋だとも思いました。

そこで、実際に行くことにしました。

チャンスを得たのは12年前。

JICAのテストに運よく受かり、カンボジアに行くことができました。

そこでのお話は…、長くなるのでまた折に触れて紹介します。

ちなみに、子どもたちはとても熱心にこの話を聞いていました。

集中力が研ぎ澄まされている状態は、一目瞭然です。

視線が切れません。

自然とうなずきが起きます。

特に、先に紹介したお弁当の話の際は、教室の空気がピンとなっていました。

新しい知に出会い、新たな価値観や考えに接して、子どもたちの鋭い感性が反応していることが伝わってきました。

こうしたことについて学ぶ勉強のことを、国際理解教育（または開発教育）と言います。

最近では、「ESD」という言葉にもなって、学習指導要領にも記述がどんどん増えてきています。（新学習指導要領では、その扱いがさらに大きく広がっています。）

グローバル化がますます進展していく世の中において、世界の人とどのよ

うにつながり、どのような社会を作っていくかと言うことは、これからますます必要性を高めてくる分野でもあります。

以前紹介した、フェアトレードの授業などはまさにここに直結します。

豊かになった社会を「当たり前」と受け止めるのではなく、どうやってその豊かさが実現しているのかという背景を知り、世界との繋がりを、そして手の携え方を学んでいく学習です。

思えば、日本もかつては発展途上国でした。

テレビが憧れだった時代があり、マイカーが憧れだった時代がありました。鶏肉や魚なども、基本的には家でしめ、さばくことも日常の文化として存在していました。

そのころには、今よりもずっと「有難さ」を感じる機会は多かったように思います。

以前、あるテレビでこんな企画を目にしました。

100歳の方50人を集め、「人生で一番おいしかった食べ物は？」と尋ねる企画です。

ご高齢の方々は答えました。

3位はカレーライスでした。

2位はチョコレートでした。

そして、圧倒的な票差をつけて1位に輝いたのは・・・

「白米」(ごはん) でした。

今では当たり前のように食べられるようになった白いお米のご飯は、かつては何よりのごちそうでした。

滅多な事では食べられない、貴重な貴重なものだったそうです。

100年生きてきた中で、最もおいしかった食べ物が「ご飯」。

私はその放送を見ていて、普段口にしていない白米の有難さを改めて思いました。

現代は、当たり前のように白いご飯が食べられます。

スーパーには、パック詰めのお肉や魚が並んでいます。

テレビも自動車も、珍しい存在ではなくなりました。

他にも、食べ放題、飲み放題、歌い放題、使い放題、定額、サブスク…

物だけではなく、あらゆるサービスが溢れている時代です。

でも、やっぱりそれは当たり前ではありません。

こうした「知」や「歴史」は誰かがつないであげないと、子どもたちはすっぽりと抜け落ちたまま大きくなっていきます。

それこそ、全ての物が「当たり前」だと感じながら。

「以前の暮らしに戻ろう」ということを言いたいわけではありません。

要は、「便利さ」を追求する中で見失った「豊かさ」があるのなら、今一度そうしたことを見つめてみることも大切な学びだと思うのです。

近年はキャンプブームが世間を席卷していますが、それもこの「豊かさ」と大いに関係していると思えてなりません。

加速的に便利さを増す世の中だからこそ、豊かさとは何かを考える機会を大切にしていきたいと思っています。

☆↓読者ページはこちらから↓☆ご意見ご感想など気軽にお寄せください

<https://docs.google.com/forms/d/1qqf4cPLcjpcWaimWdu-6IFM73JahODYK4ROldg7jLxM/edit>

